



Piled up by villagers "a village of stone walls"

村人たちが積み上げた「石垣の村」 宮崎県・日之影町

Special Features / Civil Engineering Heritage X



株式会社建設技術研究所/地球環境センター
松嶋健太(会誌編集専門委員)
MATSUSHIMA Kenta

特集
土木遺産 X
九州地方／現存する「石」の土木施設

伝統の継承

日本には、代々技術を伝承する伝統が息づいているのではないだろうか。諸外国がどのようにになっているのかは寡聞にして知らないが、親から子へ財産ならぬ技術や精神を伝えていくものとしては、歌舞伎などをはじめとする伝統芸能に多いように思われる。伝統工芸の中には、花火や絹織物の職人のように、何代目として継承していくものがある。芸術性の高い工芸品では、技術的な要素だけでなく、作品の本質を形成する精神性の伝承も重要となるため、親子のようにともに過ごす時間が長いほうが好都合なのかもしれない。

宮崎県日西臼杵郡之影町にある「石垣の村」でも、石垣を積み技術が小さな集落の中で奇跡のように代々受け継がれている。

緑濃い石垣の村

日之影町は宮崎県の北部に位置し、面積は277.68km²、2010(平成22)年10月1日現在の人口は4,463人の自治体

で、面積の約92%を森林が占める豊かな自然と山村文化を利用した観光や農業が盛んな地域である。町の一部は祖母傾^{そぼかたむき}国定公園に指定され、傾山^{かたむきやま}をはじめ、矢筈岳^{やはずだけ}、丹助岳^{たんすけだけ}、五葉岳^{ごようだけ}などの森林は貴重な動植物の森林生態系保存地域にも指定されている。町の東西を貫流する五ヶ瀬川に注ぐ日之影川や綱の瀬川などの清流は深いV字谷を形成し、新緑や紅葉など、四季折々の森林景観を楽しませてくれる。

「石垣の村」として知られる戸川地区は、日之影町役場のある中心部から北約7km、日之影川沿いに大分県佐伯市宇目に通じる県道6号日之影宇目線を車で10分程の緑濃い山あいに位置している。

戸川地区に入るとすぐに高い石垣が風雨に耐えた白い姿を現し、それまでの草木を中心とした世界に対して、一種の奇観を呈している。2011(平成23)年8月31日現在の人口はわずか7戸56人である。盛時でも9戸とごく小さな集落である。にもかかわらず、石垣は住居や田畑の多くに使われており、まさに石垣文化がこの小さな集落に

花開いたように見える。この景観のすばらしさによって、1999(平成11)年には「日本の棚田百選」に選ばれている。翌年には「第8回美しい日本のむら景観コンテスト」で全国農協中央会賞を受賞、2002(平成14)年には鉾山のトロッコ道跡が「遊歩百選(読売新聞)」に認定されている。

なぜ、このような山あいの小さな集落に「石垣の村」が形成されたのだろうか。

石垣に守られた村

日之影川の透明な流れを望む標高954mの戸川岳の雄大な地形の麓に佇む戸川地区の集落には、膨大な石垣が棚田を守るように続いている。宅地や田畑、石蔵、防風垣と村全体が石で守られているようにできているこれらの石垣のうち最も古いものは、嘉永年間(1848～1854年)から安政年間(1854～1860年)に築かれたものと言われている。今では7戸ある家のすべてに石垣と石蔵がある。地区内の最も高い石垣は11mにも達し、棚田のものとしては日本一の高さを誇る。畳一枚程の巨岩と樹木で作ったコロやテコを利用して、匠の技によって作られたこれらの変化に富んだ石垣景観は、2003(平成15)年に文化庁の「文化的景観地区」として選ばれている。

戸川地区で今に残る最初の石垣を作ったのは、石垣の村管理組合の坂本博組合長の先祖にあたる坂本寅太郎である。寅太郎は1869(明治2)年に69歳で亡くなったとの記録もある。戸川地区の歴史は残念ながら良くわかっていない。記録として残されたものは少なく、村の歴史を知るすべは、長老等によって残された口伝と石垣に刻まれた文字しかないのだ。それによると、大正時代(1912～1926年)に牛馬車道が完成するまでは、人の出入りもほとんど無く、全く孤立した地形の底で、集落の人たちは急斜面に自然石を積み重ね、宅地をつくり、耕地を拓き、ほとんどを自給自足で賄ってきたとされる。

そもそも、戸川地区は田畑に利用できる水に恵まれなかったため、主な農作物は麦やトウモロコシなどの畑の作物、シュロやコンニャクなどの山の産物によって生活をしていたのだ。また、このほかにスギやヒノキの植林による林業が行われてきた。

1925(大正14)年頃に宮水まで開通した七折用水路が、村の農業を大きく変えた。用水路を流れる豊かな水を利用することができるようになったのだ。畑作から稲作への転換が進み、集落内のいたる所で田を開くことになったが、そのほとんどが石垣によって形づくられた棚田



写真1 戸川岳の麓に築かれた石垣の村



写真2 棚田としては日本一高い11mの石垣



写真3 七折用水路からの豊かな水



写真4 蓋により流れは見えない七折用水路

であった。今私たちが見ることのできる「石垣の村」の姿は、この頃に誕生したものであるといっていよう。

村の農業が畑作から米作に切り替わるようになると、精米作業に多くの人の手と時間を使わなくてはならなかった。これを解消するために考え出されたのが、水田に引いた豊かな水を利用した水車である。人手の少ない村だからこそ知恵といえるのかも知れない。朝、収穫した米を^{もみ}のまま水車小屋の臼に入れておくと、夕方にはきれいな白米に仕上がっていたそう。最も多い時で4軒もの水車があり、精米や製粉をする音が威勢よく村の中に響いていた。

残念ながら、現在、村で見ることのできる水車は、のちに復元したものである。かつては住民にとってなくてはならない施設であった水車も、時代を経て農業機械が発達するにつれてその役割を終えていったのだ。そのため、いつしか水車があったことさえも忘れられようとしていた。しかし、村の石垣が脚光を浴びるように



写真5 復元された水車小屋



写真6 切り出された石で整然と組まれている石蔵

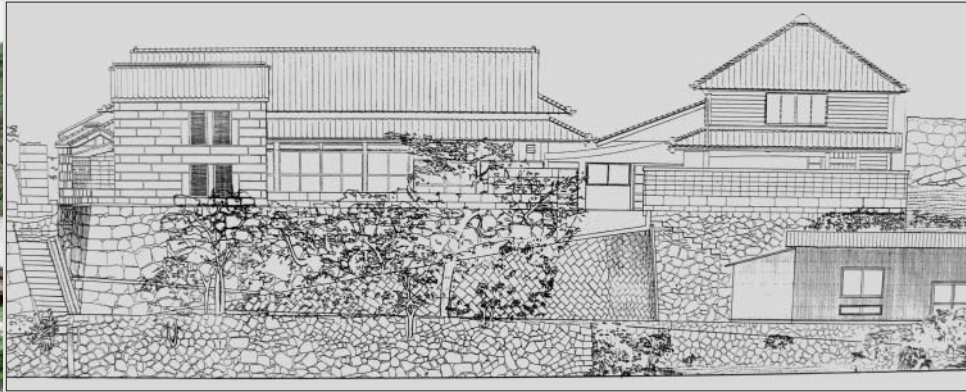


図1 石の組み方の違いが分かる、学生が卒業研究で作成した立面図

なるのに合わせ、せっかく石垣の良さを見直すなら古き良き時代の水車も再現することになり、1997(平成9)年度の「ふるさと水と土保全モデル事業(歴史的遺産)」により町営の施設として復元されたのである。村の片隅に復元された小さな水車小屋は、昔からあるように佇んでいる。

火災防止のために

村を通る県道6号日之影字目線は、かつて銅や錫を産出した見立鉱山との往来に使われていた道であった。当時の村では作っていたとうきびの茎を燃料にするため、乾燥させる目的で家々の脇に積み置いていたのだが、この往来は夜間も松明を使って人が移動していたため、乾燥したとうきびの茎に火が燃え移ることがあったようだ。そこで、寅太郎は石垣で住まいの地盤の高さを上げ、松明の火の燃え移りを防いだという。つまり「石垣の村」の発祥は火災の防止でもあるのだ。

戸川地区ではもともと険しい地形から田を作ることもなく、村の産業はシュロとコンニャクイモの栽培に頼っていた。背後にある戸川岳は石灰岩から成っており、山の斜面はコンニャク栽培に適していたこともあり、どこの家でも盛んに栽培していた。大正から昭和初期の頃には、コンニャクイモ11貫(41.25kg)を米俵に詰めたものが、5円程で売れたとある。多い時で200俵(8,250kg)も採れた。土の良いところでは、一つで約6kgにもなるコンニャクイモが採れることもあった。シュロも同じように葉が1枚2銭と高値で売れ、経済的には比較的恵まれていたという。特に、シュロは手入れもいらず都合の良い時に収穫することができた。それが、石垣づくりという大仕事を支えていたのかもしれない。村にはもう一人、富士本嘉三郎という石積みの名人がおり、1855(安政2)年の大地震で崩れた江戸城の

石垣修復工事に、先の寅太郎とともに石工として召集されている。村の石垣には自然石を加工しないまま積む「のづら積み」と、石を削り形を整えて積む「切り込みはぎ」の二つの工法を見ることができる。のづら積みは古く戦国時代に築かれた城などにも使われている工法であるのに対し、切り込みはぎは寛永時代以降に特に用いられた工法で、江戸城に使われているものが有名である。おそらく、村で使われている切り込みはぎの工法は、江戸城に召集された二人の石工が持ち帰ったものなのではないだろうか。

ともあれ、戸川地区に日之影川から水を引く七折用水は、1920(大正9)年に工事が始まり1925(大正14)年に完成した。総延長36kmにも及ぶ大規模な用水により、人々は山を拓き水田を作ることができるようになった。村の中には11mと日本一の高さを誇る石垣があるが、これが大正時代に行われた最後の大仕事であった。水田の開墾は昭和30年代まで行われていたが、明治時代から村人たちの力でこつこつと積み上げられた「石垣の村」は、大正末期にはほぼ現在と同様の姿になった。

石工職人としての高い技術

江戸城の石垣修復工事に石工として赴いていた寅太郎と嘉三郎が戻ると、村では石垣づくりが本格化した。特に、1897(明治30)年に起こった火災をきっかけにした石蔵づくりや、七折用水による棚田づくりに、その石組みの技術が生かされた。



写真7 急斜面に作られているため上から望むと集落がほとんど見えない



写真8 深い谷を登るように築かれた石垣



写真9 清々しい日之影川の水と深い緑に囲まれた戸川地区

盛時でも9戸しかない小さな集落での石垣づくりは、今も互いに助け合う「手間加勢」という言葉があるように、集落の人たちが力を合わせて作ったものである。

のづら積みは主に棚田の石垣に使われており、田畑を開墾する際に出てきた石を使っている。見た目は、ただ石を積み上げているように見えるが、素人が積み上げると石垣が垂直に立ってしまい崩れやすいものに成りがちだが、熟練者が積むとアーチができて崩れにくくなる。この辺りの積み方は、年配者が若者に実地で教える「OJT」により継承されてきたようだ。そのため、石垣を実際に積んで、田畑を開墾することのなくなってしまう現代では、のづら積みの伝承が難しくなっている。

切り込みはぎは主に石蔵などに使われており、整然と積み上げられた石が美しい佇まいを石蔵に与えている。ここで使われている石は村で産出したものではなく、2km程下流にある熔岩を切り出して使っている。

石垣の継承

戸川地区では石垣を大切に保存している。しかし、一度崩れた石垣は現在の法体系上、同じように積み上げて修復することは許されていない。力学的な構造基準を満たすことができないのだ。そのため、村の一部の棚田には、コンクリートブロックによる修復が行われている箇所があり、やむを得ないとは言え、伝統的な景観を損ねてしまっている。近年では、石垣と石垣によって形成された景観に対する理解が深まり、石積みによる修復が可能にはなったが、のづら積みとは異なる現代的な石組みができあがってしまう。

そのような問題を抱えつつも、先祖代々受け継がれてきた貴重な棚田は、高齢化が進んでいる現在においても生産調整のための休耕田を除いては水稻の作付けが行われている。さらに、棚田を取り巻く導水路も耕作者によ



写真10 崩れた石垣のかつての修復方法

って朝夕見回り管理がされ、水路の決壊や土砂崩壊等に絶えず気が配られている。20年程前から町内でも先がけて棚田の畦畔^{けいはん}を保全する目的でコンクリートによる整備が自費で行われてきており、地区内ではほとんど完了している。

それだけではなく、1982(昭和57)年の新聞の取材を契機に高まった「石垣の村」への関心を活かして、日之影川の清流、そそり立つ奇岩怪岩、石積みの棚田、新緑と紅葉等自然の姿を美しくとどめる「石垣の村」としての景観、アユやヤマメ釣りのポイントとしての高い評価は交流活動の拠点としてふさわしいことから、県外の数多くの人々に利用されている。

全国的な流れと同様に、この村でも高齢化が進んでいるが、農業を主とする地域では珍しく若い世代が残る傾向にあり、農地が荒れてしまうことは避けられているようだ。

このように、今も静かな佇まいを残している「石垣の村」だが、1990(平成2)年には、地採れの山菜や地元の特産物を味わえる「石垣茶屋」を地区中心部にオープンさせた。そこでは宿泊することもでき、旧トロッコ道のウォーキングなどで自然を満喫することができる。

1991(平成3)年には「戸川地区石垣の村管理組合」を組織した。組合では「日本の棚田百選」認定を機に、石垣の景観と田植え前の棚田を地域おこしに活かそうと、2000(平成12)年から毎年4月に「棚田まつり」を開いている。この祭りには多くの人が訪れ、町内外との活発な交流が始まった。住民総出の「手間加勢」の伝統は、地域づくりにも存分に発揮されているようだ。

<参考資料>

- 1) 日之影町史四 資料編2 村の歴史|日之影町 平成11年3月
- 2) 「石垣の村戸川へようこそ」|日之影町 平成23年
- 3) 「石垣の村物語」|石垣の村管理組合 昭和63年

<取材協力・資料提供>

- 1) 戸川地区石垣の村管理組合
- 2) 日之影町役場地域振興課

<図・写真提供>

- 図1 戸川地区石垣の村管理組合 P20上、写真4 浅見暁
写真1、7、8 松嶋健太 写真2、3、5、10 佐々木勝
写真6 塚本敏行 写真9 日之影町役場